

パネルトーク

パネリスト
小池一子・石田秀輝・やなぎみわ



小池 それぞれが専門的なお立場でありながら、共通する問題意識をキーワードとして発見できたように思います。それぞれのお話をお互いにどう思われたのか、率直なご感想から始めていただけますでしょうか。

石田 やなぎ先生は、なぜ「老い」というものをお考えになるんだろうと思っておりましたが、「若い人は『老い』に解放感を求めているのではないか」というお話に、「なるほどなあ」と。まさにそのとおりですよ。江戸時代、「老い」は美しいものだったし、「死」も決して悲しいものではなく、輪廻の一つのドライビングフォースでした。そういうものを正面からとらえるのは、新しい暮らしのドアの開け方なのかな？

あるいは僕たち自身が長生きするために、薬を飲んだり、何かをするのではなくて、年

を重ねていくことをどう受け止めていくのか。それを美しいものとして自分自身の中で育てていく。そんなことを考えなきゃいけないのかなと、やなぎ先生のお話を聞いていて、すごくうれしくなりました。感動しています。

小池 やなぎ先生はいかがでしょうか。

やなぎ 私は、芸術はエコではないということを前提にしていますので、石田先生の環境問題のお話と相反することになるのではないかと考えていたのですが、決してそうではありませんでした。芸術も科学も、わからないことを考えていくというか、そこに石を投げるような行為だと思うんです。「これをすればエコになる」という即物的なものではなく、かなり距離を置いた考え方をされていると。そこにとても共感を覚えました。

小池 そうですね。石田先生がおっしゃったバックキャストという考え方は、やなぎ先生の「マイ・グランドマザーズ」と「グランドドーターズ」にもつながると思います。

石田 まさにそのとおりです。僕たちは、イノベーションを起こそうとか、地球環境で新しい暮らし方をつくろうすると、ゼロベースでやるようなところがあるんですけど。90歳ヒアリングやバックキャストをやっていると、「確かな未来は懐かしい過去にある」と思います。過去を踏襲するのではなく、過去に我々が培ってきたものを、どうやって咀嚼をして新しい価値観に持っていくかということを、最近強く思うんですね。

今日、やなぎ先生がおっしゃった「老い」や「老女信仰」は、我々が失ってはいけない過去の形をめんめんとして残しています。そういうものをどうやって咀嚼したらいいかはまだわからないですけど、そういうものを受け止めることで、我々の中にいろんなものが芽生えてくる。それが、新しい価値観や失ってはいけない価値観をつくるのではないかな、そんなふうに感じました。

小池 たとえば、やなぎ先生というアーティストから課題が出されて、そのイメージを普



通の女性がつくっていくわけでしょう。そこでイメージされるものって、欲望ですよ。その欲望の強さとイメージの強さが、私は非常に印象に残りました。

やなぎ 欲望は確かに強い(笑)。でも、自分の恥ずかしいまでの強い欲望を、眺めて笑うということが大事なんです。女性と笑って、なかなか

か難しい関係にあると思いますが、自分の姿を笑うことができる人が、うまく老いるのではないかなと思ったりもします。

「古い」というのは、とても残酷なものです。昨日できたことが今日はできなくなる。精神的にも肉体的にも衰えてくるというのは、なまやさしいものではありません。

モデルさんたちは、さまざまな年齢の方がいて、「古い」に対する感覚も違います。たとえば、小学生の女の子は、アニメーションに出てくる魔女になりたいとか、そういうファンタジックな感覚しかないかもしれませんが、それはそれでOKなんです。40代の方になると、自分のご両親の「古い」を見ているので、もう少しリアルなものになってくる。逆に、ものすごく翔んだものになったりもする。それもそれでありです。「古い」のネガティブな部分をわかってないとか、リアリティがなさ過ぎるということは、織り込み済みで、その時想像しうるかぎりの、自分も含めたその時の社会と世界、未来を語ってもらって、私と共同制作する。かなり楽天的な作品です。とりあえず50年後に自分と世界が存在する、ということですから。

小池 石田先生、これはフォアキャストになるのでしょうか。

石田 そうではないです。積み重ねたものをひも解いてものを見るのは、決してフォアキャストではありません。

今日、小池先生とやなぎ先生のお話をうかがって思ったのは、いろいろな物差しでものを見るのが大事だなと。いまは、いろいろな物差しを持つことをよくないことだと言ったり、コップを一つ動かすのさえ、「環境的にはどうなんだ」という物差しで見ている。大事なのは、「ワクワクドキドキして楽しいんだ」ということを前提に、それを動かす土台として、地球のことや次の世代のことを考えているかどうかというだけの話であって。物差しをいかにたくさん持ってもらおうかということを、僕の場合はテクノロジーを通して伝えていかなくてはいけない。

エコカーって、「リットル30キロ」という物差ししかないじゃないですか。でも、60kgの人を運ぶのに、1.6tの車がなぜいるのか。1.6tの車のうちの400kgが安全装置なんですよ。車の命が終わるまでに一度も使わない。そんなことを考えると、違う物差しで車を見たら、もっとすてきな形になるんじゃないか、もっとすてきな道具になるんじゃないかと思うんです。あらゆる切り口が自在に見えるような、フレキシビリティを持った物差しを、これからの人に持ってもらおう一つのきっかけが、今日の小池先生とやなぎ先生のお話だったと思っています。

小池 石田先生のお話に、「自然はテクノロジーの宝庫だ」とありました。やなぎ先生や私



にとっては、自然はアートやデザインの宝庫でもあるわけです。ネイチャー・テクノロジーのお話を、もう少しお願いします。

石田 テクノロジーというのは、ラテン語では「テクネ」ですけれど、ギリシャ語では「アルツ」で、「アート」なんですね。ラテン語で自然科学は「スキャンティアナチュラリス」(自然の真実を知ること)です。アートが縦糸

だとすると、自然科学は横糸なんですよ。その真実をうまく使って、新しい価値観を生み出していく。これがまさにテクノロジーの本質だと思うんですね。

自然というのは、生命一つをとっても38億年の歴史があって、その中で淘汰を繰り返しているの形ができています。我々が科学技術と偉そうなことを言っても、たかが200年。ソクラテス、プラトンの時代から言ったら、1千年ちょっとしかありません。そう思うと、自然はとてつもない世界なんです。

たとえば昆虫だけでも3000万以上の種類があって、その1種類が過酷な自然の中で、淘汰の繰り返しを重ねて生まれてきたのであれば、1匹1匹の虫が、僕たちには信じられないくらいのテクノロジーを持っている。砂漠にいるキリアツメゴミムシダマシは、砂漠で水を飲むために、朝方逆立ちをします。風上に向かって逆立ちをすると、背中に朝のちょっと湿度を含んだ空気がぶつかって水滴ができる。その水滴がころころと落ちて、逆立ちしている口に入る。こんなシステムをつくったら、エネルギーをまったく使わずに空気中から水をとることができます。

あるいはヤモリが天井を走り回る。つるつるの天井でも凸凹の天井でも走り回る。ヤモリの足の裏に吸盤は付いていないんです。毛が生えているだけなんですよ。その毛が天井に引っ付いているんです。こんなものができたら、接着の概念が変わってきます。

こういうものをもう1回ちゃんと見ましょう。そして、バックキャストでできたライフスタイルの中で使えたら、こんなに楽しいことはないですよ。「自然のすごさをかしこく使おう」、それがネイチャー・テクノロジーの一つの概念で、今日お話したような風力発電機など、いろいろなものができつつあります。

小池 石田先生は、マイクロコスモスの世界にも目を向けていらっしゃると思うんですけど、先ほど見ていただいたモーターバイクのミニチュアの分解にしても、お重のお弁当の詰め方にしても、これは日本の特性の一つでしょうか。

石田 僕は、日本人独特の自然観だと思います。日本人って、先進国でおそらく唯一の自然観を失っていない民族です。先進国のほとんどが一神教になるんですけど、生きるか死ぬかの限界のところまでいかないと一神教にはならない。たとえばヨーロッパでも、15世紀から16世紀にかけて、森林が10%台に落ちています。コロンブスは、新大陸を発見する船にマストをつくれなかったんです。ヨーロッパから木という木がなくなってしまったというぎりぎりのところから、起死回生で産業革命を起こしていくわけですね。

ところが日本は、この2000年の間、森林率60%を一度も切ったことがない。こんなに緑が豊かな国はないんです。逆に、緑が人を襲ってくる国もない。僕たちは、自然と決別なんてできないですね。日本の陸地面積は、世界の陸地の中の0.1%しかありません。けれどマグニチュード6以上の地震は、世界の25%来ます。雨が降ると龍神が棲む川の勾配は、世界の平均の10倍です。だから、家の前に庭があって、野良があって、里山があって、奥山があって、竹があるんです。

里山は緩衝地帯になっていて、そこから向こうは神の住む神聖な場所として崇められる。だから、日本の神聖な場所は、緑との結界をつくる。ヨーロッパの教会の前は芝生の緑ですが、日本の神社仏閣は白い玉石を敷いて緑との結界をつくる。それぐらい、自然は襲ってくるんです。その一方で、自然は我々に信じられないぐらいの恵みも与えてくれる。自然に生かされていることを知って、自然を活かしながら畏怖する。そういう関係をずっとつくってきた中に、自然の美しさを生活に取り込むという概念があったのではないですか。自然を模倣したり、自然の美しさを残そうとしたり、お菓子にして食べちゃおうと思ったり。こんな概念って、日本にしかないと思います。

小池 そうですね。茶の湯のことを思うと、人間にとって一番大事な水と火を密室に閉じ込めて、そこで煮炊きもするという。これはすごいことですね。生きる知恵としての精神性をもたらすものです。

石田 たとえばお金持ちだったら、山を買えば自然を買えるわけじゃないですか。でも日本人のお金持ちは、山は買わないんです。その代わりに、見立てをして、小さな坪庭に富士山を持ってきたり、駿河湾を持ってきたりするわけですね。こういう自然観は、外国の人にはいくら説明してもらってもわかってもらえないです。自然の見立てという概念は、日本人独特ではないでしょうか。能や踊りも、何かに見立てているわけです。その美しさとは、大事にすべきだし、美しさだけでなく、暮らしの中にあるということは、とてつもない財産だと思

います。

小池 やなぎ先生、いかがでしょうか。

やなぎ 私は京都に住んでいるので、そういうことを日常的に感じることはありますね。



私の住んでいる家は、築90年ぐらいの大正時代の建物で、とにかく寒い。昔の冬の生活はこうだったんだろうな、と存分に味わうことができます(笑)。すきま風だらけで、暖房は効かない状態だし、身体的にも辛い。でも空間的に余裕があり、家のあちこちに光の届かない闇がある。そのほうが精神的には楽な時があるんですね。

もちろん、東京に住んでいるほうが刺激はあるんですけど、作品をつくる時は、どうしてもそこをシャットダウンしたくなる時もあるんです。京都を夜に歩くと、町中で巨大な寺社仏閣の屋根のシルエットを見上げる瞬間があり、タイムスリップしたように感じられます。要するに、街の中に余計なものがあることが大事なのかもしれません。ニュータウンのように現在の生活の必要に応じたものが過不足なく効率的に配されているより、いまの日常生活と程遠いもの、1000年前の遺跡みたいなものがたくさんある街のほうが、楽なんですよ。

小池 私も、過去の美しさを発掘することを好みますが、「だから、日本がすばらしい」というようなことを言い立てたいんじゃないんです。身の回りでいろいろな発見をしていくということが続けたいと思っていますけれど、これだけ環境劣化が言われている中で、積極的に目を向けていきたい環境づくり。そういうことが、持続可能な社会をつくっていくことなのかなあとと思います。

皆さまにアンケートを書いていただき、いくつか質問をいただいています。まず石田先生に、「社会や国家レベルで、パラダイム・シフト、バックキャスト思考への転換をどのように進めていけばいいのだろうか」というご質問です。

石田 そもそも日本が政治で動いたことってないですよ。だから、「大変だから、政治がなんとかしろ」と言ったって、いままでしていないのにできるわけがない。大事なのは、僕たちだと思えます。すでにもう予兆はあります。若い人たちは車に乗らなくなった。自転車がいい。あんまりものを欲しがらなくなり、家庭菜園だとか、フリーマーケットに

行くだとか。大きく転換をする予兆というのは、もうあるんです。

もう一つ大事なことは、すべての人がバックキャストはできないんです。そんなに簡単じゃない。リーダーがバックキャストをすればいいんです。そして、バックキャストでできたものを見れば、みんながすてきだと思うんです。企業のトップの方々が、「新しいライフスタイルをつくらうよ」と言って、世の中をちょっと押すことで、一挙に変わっていくのではないかと思います。僕も一生懸命、いろんなものをつくって、世の中に発信をしたいですね。

日本の政治家には、原子力が止まったから何かと置き換えるのではなく、「震災前の70%のエネルギーでもみんな幸せに生きていける。みんなで作ろうじゃないか」ぐらいのことは言ってほしいですね。そういうことと、世の中の流れの予兆の部分が噛み合っていけば、大きく変わる。変えなきゃいけないと思っています。

小池 3月11日のことは、日本列島にいるかぎり、みんなの頭から離れないですね。やなぎ先生は、いかがですか。

やなぎ 震災の時は広島近代美術館にいて(奇しくもヘンリー・ムーアの彫刻「アトミック・ピース」を考察する展示でしたが)、そこで、iPhoneで、原発が爆発するのを見てしまいました。その時のリアリティというのは、一生忘れられないと思います。私は実家が神戸ですから、阪神・淡路大震災で実家が被災した時も、神戸に行くことができずに、実家の近くが燃えるのをテレビで見ていたのですが、足元が揺らぐ感覚でした。この阪神・淡路大震災の時に、しばらく作品をつくるどころか見ることもできなくなり、そもそも芸術は、余剰のものであり特効薬ではないことはわかっていました。

ただ、現在、芸術の表現は試されることで、強化されています。すべての人が「どうすればいいのか」ということを突きつけられた。表現者だけではなく、すべての人が。それは、表現者がわざわざ何かをする必要があるのか、表現者である必要があるのかということ突きつけられたということなので、これはよかったことかなと思いますね。

カタストロフを前に、一人ひとりが鏡を持つような感じです。シェイクスピアが「演劇というのは、鏡を自然(世界)に向けて掲げることである。そこに善も悪もすべてが映る」とハムレットに言わせているのですけれど。芸術だけに限らず、すべての人が鏡で自分をのぞき込むだけでなく、翻して世界に向け始めた、と感じましたね。作家や表現者よりも鑑賞者の目が変わっていくことを期待しています。

小池 私の周辺にも、しばらく制作ができなくなったアーティストが何人かいました。身

を律して、そして制作に向かっていくという、そのことに感動しましたね。

やなぎ先生への質問があります。「生と死に対する敬意、遊びができるアウトサイダーについて、老いの中で触れられていましたが、ご自身は、高齢化社会における人としての生きがいに何を求めていますか」。

やなぎ 高齢化社会の生きがいとしては、次の世代を育てるということですよ。それをいま、非常に感じています。

原発のことは、とにかく次世代に、いやこれからの子どもたちすべてに、申し訳なかったとしか言いようがない。私も、学生の時に、チェルノブイリで危機意識を持ったけれど、特に何をやるわけでもなく、原発を「いつの間にか在るもの」と受け入れて、こういう事態に至ったわけです。その負の遺産を次の世代が負っていくわけですよ。私たちにいまできることは、死ぬまでに少しでも事態を好転させられないかということだと思います。

小池 「未来につなぐライフスタイル」をどのように作り出していくか、いまが正念場ですね。石田先生のお話を聞いていると、「いま、切り替えなければ」という思いが強くなりますけれど、石田先生、高齢化社会ということに対して、どう思われますか。

石田 僕は、高齢化であるかどうかは、それほど大きな意味を持たない。持つてはいけないのではないかというのが、最近の思いですね。僕が大学の頃は、日本はこのままでいくと、人口が1億人超えてしまう。えらいことだと大騒ぎをしていました。いまは、少子高齢化だと大騒ぎをしています。「なるようにしかならんのだろう」というのを前提に考えるということをもっとやらないといけないですね。

一次産業の人たちには定年がありません。二次産業、三次産業の人たちだけが定年をつくって、「定年を超えたら大変だ」と大騒ぎをしています。終身雇用と定年がセットになって存在する社会システムだったのに、終身雇用というところはずして、定年という概念だけ残してしまったから大騒ぎになる。そろそろ二次産業も三次産業も、「定年なんかないんだ。みんなが一生働くんだ」という概念を持ってくるほうが先ではないのでしょうか。定年になってハローワークへ行って、「あなたは何ができますか?」「部長ができます」。これではダメでしょう。

「少子高齢化は大変なことだ」という物差しで見られていますけれど、じつはそれをちゃんと受け止めると、けっこう楽しいことになるのではないかと。そういうことを誰かが言い出さなくてはいけないのではないかと思います。僕たちがこんなふう思うことが、新しい仕



事をつくったり、若い人たちに夢を与えることになるのではないのか。みんなが「大変だ、大変だ」と言っていたら、若い人に夢なんか与えられません。

やなぎ 子どもの頃から私の回りには自営業の人しかいなかったもので、サラリーマンという存在がよくわからないのですが。震災のあと、親戚とか知り合いが、東日本から疎開してきました、2～5歳の子どもが4人に、祖父母が加わり、一気に三世代家族になりました。日中、大人は仕事と家事を分担し、夜中にネットで放射能のことを調べつつ対策を練る。おばあちゃんは、本当に役に立ってくださるんですが、おじいちゃんのほうは……(笑)。幼児が一人増えたのと同じでした。4人の幼児が保育園へも行かずにずっと家にいるわけですから、大人全員で面倒を見ないと回らないのに、おじいちゃんは新聞を読みながら大所高所から意見を言うだけで、絶対に自分で動かない。これにはホトホト困って、私も本気で怒りました。台所に立ったり、冷蔵庫を開けちゃいけないと思っていたんですって。子どもも触っちゃいけないと思っていたらしいんです。ところが、1カ月後には、なんと離乳食までつくれるようになったんです。やればできるんです。それをわからずに会社だけに献身して、もったいないことですよ。

石田 おじいちゃん、よかったですね。

やなぎ 急成長しましたね。これからの人生が豊かになったんじゃないかと思います。自分のご飯を自分でつくれるということ、これほど大事なことはありません。

小池 最後に、一つのご質問。「今日は、『未来につなぐライフスタイル』というテーマですが、3人の先生にとって、ライフスタイルとは何ですか?」。

私は両極あって、その間を揺れているような感じです。自然のままでいたいと思うと、お掃除もしないでのんびりとしている時もあるし、やたらに仕事に向かってしまう時もあります。自分なりの自然のリズムみたいなものが、ライフスタイルであるのかもしれませんが、それは、生活のいろいろな局面で細かくあって、どんな住まいが好きとかいう暮らし方のディテールに入るのかもしれませんが、大きな意味では、自分が納得し、他人にとっても説得力のある生き方がいいなあと、思っています。では、石田先生。

石田 僕は、こんなふうに思っています。ライフスタイルというのは、暮らし方の形ですよ。僕たちの潜在意識の中に、「楽しみたい」「自然と関わりたい」「自分が成長したい」「社会と関係を持ちたい」というのがあります。それを素直にやることではないのかと思うんですよ。

僕は、自分が成長するために、たとえばネイチャー・テクノロジーという研究をする。あるいは、暮らしの中で成長したいために、料理をつくる。つくった料理を誰かにちょっとほめてもらいたいし、料理を通して近所の人たちとコミュニケーションがとれたらいいな。そんなことを素直にやっていくことができれば、それは僕にとって、とってとてもすきなライフスタイルだと思います。

小池 やなぎ先生は、いかがですか。

やなぎ 「いつも大荷物を背負って走っている」と人に言われたことがあります。私も自分でわかっているのですが、どうもそれが私のライフスタイルのようで、変わらないですね。すべては制作の調子次第だし、決して省エネ型ではありません。40歳を過ぎてから、ますます重量過多です。子どもや学生も乗っかっているし、演劇と美術はやりたいことが増える一方だし。ただ必要不可欠なものははっきりしてきて楽になった部分もあります。制作を前進させるエネルギーを持ち続けるライフスタイルを心がけないといけないですね。

小池 今日のシンポジウム、そろそろクロージングの時間です。つたない司会でしたけれども、お話を閉じていきたいと思います。

環境問題とは何なのかということについて、石田先生のご指摘が非常に印象に残りました。やなぎ先生の老婆信仰の発見は、美術史をそのように見ていけるということが示唆され、いろいろなことを考えさせられました。お二人とも、ありがとうございました。